

特257  
314

明日の醫術  
第二篇中



始





病氣症狀と其解剖

茲に、病氣症狀といへば、大別して左の如きものであらう。發熱、痛苦、搔癢苦、不快感、嘔吐、下痢、浮腫、盜汗、眩暈、不眠症、憂鬱感、麻痺、咳嗽、逆上、耳鳴、痙攣、冷へ、便秘等であらう。之等に就て、私の研究によつて得たる理論を説いてみよう。



熱

醫學上、發熱の原因として今日迄種々の説が行はれてゐるが、今日一般的には、發熱中樞なる機能が頭腦内に在つて、それが何等かの刺戟によつて熱が発生するといふ説である。又、四肢の運動に由る爲と、肝臟及び腎臟からも發熱するといふのである。そうして人間の体温なるものは、食物が燃燒する爲に起るといふのである。

右の説が眞實であるとして、病氣發生の際病毒が發熱中樞を刺戟して發熱するといふ事は、一体發熱中樞なる機能の性質と、それが刺戟される事によつて、如何にして如何なる





理由によつて、熱を發生するのであるか、恐らく徹底的説明は不可能であらう。何とせれば、發熱中樞なる機能は全然無いからである。従而、病毒の刺戟などいふ意味は成立たない譯である。斯様を誤つた説が生れたといふ事は、私の想像によれば、大抵の病氣は發熱の際、頭腦に高熱があり、且つ頭痛が伴ふので發熱中樞が腦内に在ると誤認したのであらう。故に、凡ゆる有熱病に對して、頭腦を氷冷すれば可いとしてゐるのである。又四肢の運動によつて發熱するといふのは、それによつて温度が加はる爲と、淨化作用發生の爲の發熱に因る事を單純に推理したのであらう。又、肝臟及び腎臟が發熱の原因といふのは、大抵の人は、肝臟部と腎臟部は、毒<sup>毒</sup>淨化の爲、局部的微熱が常にあるものであるから、それを誤認したと思ふのである。

又、食物の燃焼によつて、体温が作られるといふ事ほど、實に嗤ふべき説はあるまい。食物が消化器内で燃焼するといふ事は、實に不可思議千萬である。それは丁度、人間の体温をストーブと同じやうに推理したのではなからうか即ち、食物の消化を石炭の燃焼の如きも

のと想像したのであらうと思ふのである。

私の研究によつて得たる發熱の原因を説くに當つて斷はつておきたい事は、恐らく前人未發の説であらうから、讀者はそのつもりで充分熱讀玩味せられたいのである。

抑々、宇宙に於ける森羅萬象一切は三大原素から成立つてゐる。即ち 凡ゆるもの生成化育は、此三大元素の力に由らないものはないのである。然らば、その三大元素とは何であるかといふと、それは日、月、地である。即ち日は火素の根原であり、月は水素のそれであり、地は土素のそれである。そうして此火、水、土の力が、經と緯に流動交錯密合してゐるのである。即ち、經とは天から地まで、太陽、月球、地球の三段階となつてゐるのであつて、日蝕の時、日月地が經に三段になつてゐるにみても明かである。即ち、天界は太陽中心の火の世界であり、中界は、月球中心の水の世界であり、地は、地球中心の土の世界である。

次に、緯とは、吾々人類が棲息しつつある此地上其ものの實體である。それはどういふ



意味かといふと、此地球上に於ける實世界は空間と物質との存在であつて、物質は人間の五感によつて其存在は知り得るが、空間は長い間無とされてきた。然るに文化の進歩によつて、空間は無ではなく、空氣なる半物質（私は假に半物質といふ）の在る事を知つたのである。然るに、今日迄空氣だけと思つてきた空間に、今一つ他の元素が存在してゐる事を私は知つたのである。それに對して私は、**靈氣**といふのである。尤も或種の宗教に於ては、靈界又は生靈、死靈、憑靈等の説を唱へたり、行者又は靈術師等も靈を云々し、歐米に於ても、靈科學の發達によつて、靈と靈界の研究は相當進歩しつつあり、彼のオリヴァーロッチ郷の有名な著書「死後の生存」や、ワード博士の靈界探險記等の記録もあつて、之等は相當信すべきものであるが、私の研究の目的範圍とは全然異なつてゐるのである。

そうして本來、物質の元素は土である、凡ゆる物質は、土から生じ土に還元する事は、何人もよく知る所である。次に、半物質である水の元素は、月球から放散されて、空氣に

充滿してゐる。然るに靈氣とは、太陽から放射される物質でもなく、半物質でもない處の非物質であるから、今日迄未發見であつたのも無理は無かつたのである。故に、最も判り易くいへば、土が物質、水は半物質、火は非物質と言へるのである。

右の如く、物質の元素が土で、空氣の元素が水で、靈氣の元素が火であつて、此三元素がいづれも密合して、そこに力の發生があるのである。これを科學的にいふならば、三元素なるものが、ほとんど想像も付かない程の微粒原子として、融合活動してゐるが、宇宙の實體である。故に、吾々の呼吸してゐる此空間が、生物の棲息に適する温度や乾度、湿度があるといふ事は、火素と水素の融合調和によるからで、もし火素が無となり水素のみとなれば一瞬にして氷結すべく、反對に水素が無になつて火素のみとなれば一瞬にして爆發し、一切は無となるのである。そうして此火水の二元素が土と密合して、土が力を發生し、萬物が生成化育されるのである。此理によつて、火は經に燃へ、水は緯に流動するものが本性であり、火は水によつて燃へ、水は火によつて動くのである。之を圖に示せば、左



の如くである。



古から、人は小宇宙と謂はれてゐるが、右の理は、人体にも當嵌まるのである。即ち、人体に於ける火、水、土は「心臓、肺臓、胃」に相當するのであつて、胃は土から生じた物を食ひ、肺は水素を吸収し、心臓は火素を吸収するのである。故に、人体に於ける心臓、肺臓及び胃は、火、水、土の三原素を吸収する機關で此機能が人体構成の最重要部を

占めて居るのにみても、右の理は肯かゝるであらう。然るに、今日迄は心臓は唯だ、汚血を肺臓に送り酸素によつて淨化されたる血液を、還元吸収するといふやうに、血液のみの機關とされてゐたのは、全く火素の存在を知らなかつたからである。

右の如く、胃は食物即ち土素を、口中から食道を経て嚥下し、肺臓は呼吸によつて水素を吸収し、心臓は鼓動によつて火素を吸収するのである。

從而、病氣發生するや發熱するといふ事は疾患部の凝結毒素を溶解せんが爲、必要量の熱即ち火素を心臓が靈界から吸収するのである。即ち心臓の鼓動は、靈界から火素を吸収する唧筒作用である。發熱時より先に、心臓の鼓動即ち脈搏が増加するのは、火素吸収が頻繁になるからであり、實際の惡寒は、淨化に必要な熱量を吸収する爲、一時体温の方への送量を減殺するからである。故に、下熱するといふ事は、毒素溶解の作用が終つたのである。

右の如くであるから、心臓が一瞬の休みなく、靈界から火素を吸収する。それが体温



である。又、肺臓も空氣界から水素を呼吸によつて不斷に吸收してゐるので、人体内の水分は、口から飲下する以外、肺臓の吸收によつて得る量も頗る多いのである。

右の理によつて人の死するや、瞬時に体温は去つて冷却し、水分も消へて、血液は凝結し、屍は乾燥し始めるのである。右を説明すれば、死と同時に、精靈は肉体を脱出して靈界に入るのである。故に、精靈の火素が無くなるから、水分は凝結するのである。言ひ換へれば火素である精靈は靈界に還元し、水分は空氣界に還元し、肉体は土に還元するのである。

次に、茲で注意すべき事がある。それは、熱を量るに体温器を用ひるが、醫家も世人も此方法は完全と思つてゐるが、私からいへば頗る不完全である。何となれば左の如き理由によるからである。

元來發熱の場合、その發熱の根據は、實は一局部である。然るに世人は全身の如く想つてゐるが、それは大いなる誤りである。私が治療の際、四十度位の高熱者を診査する場合、

指頭位の固結の淨化作用が原因であるので、其固結を溶解するや、全身的に忽ち下熱するのである。そして強度を淨化作用は全身的に發熱するが、弱い淨化作用は局部的放熱状態であつて、その局部の周圍勿論大小はあるが以外は無熱である事である。従而、体温器を腋窩に挟む場合、其附近の病氣、例へば腕の付根の毒結の淨化作用又は肋間神経痛等があれば有熱となつて現はれるが、實際離れたる股間、腎臓部、頭部等は無熱である。故に、實際上、右の腋窩と左の腋窩によつても多少の差異がある事である。甚しきは五分位差異のある人がある。右の如くであるから体温器による計熱法は不完全であるといふのである。然るに、私が行ふ計熱法は、如何なる微熱と雖も發見し得らるのである。それは掌を宛つれば一分の十分の一の微熱と雖も明確に知るを得るのである。然し、之は相當熱線を要する事は勿論であるが、普通一年位經驗すれば何人もなし得らるのである。

次に高熱に對して水冷法を行ふ事が如何に誤謬であるかを説明してみよう。即ち人體適正の体温は三十六度乃至七度であるといふ事は、其程度の体温が生活機能に適合してゐる



からである。然るに水冷をするや水の温度である零度になるから、其水冷を受ける局所の機能の活動は、著しく阻害せらるるのは當然である。此理に由つて腦溢血、肺炎、鑿扶斯其他の高熱病に對し醫療は必ず頭腦の水冷を行ふが、それが爲頭腦は水結状となるから痲痺的貧血状態に陥り機能の活動に支障を及ぼすので、本來の病氣によらずして、水冷の爲に斃れる事が多いのである。

水冷は、右の如き懸結果を招くのみか、淨化作用を強力に停止すべきものである以上、之だけは絶對に緩止したいと思ふのである。

今一つ重要な事がある。それは下熱劑の反動作用である。此事は恐らく専門家は固より世人は夢にも思はないのである。これはどういふ譯かといふと、或病氣に對して連續的に下熱劑を使用する場合、大抵一週間以上に亘ると、反動作用が徐々として起る事である。それは、下熱劑の作用に對し、反動的作用が發生するのである。恰かも或物体を壓迫すると反撥力が起るやうなものであつて、下劑を用ひる程便秘を起し、利尿劑を持続すると反

つて尿量を減ずると同一の理である。故に、發熱するから下熱劑を用ひる。下熱劑を用ひるから發熱するというやうに繰返すに於て、最初三十七八度の熱が畢には四十度以上の高熱にさへなるやうになるのである。斯の如き場合、醫家は原因不明の熱として大いに困難するのである。肺患者の執拗な熱は、右の如き原因が頗る多いのであつて、下熱の目的を以て下熱劑を用ひ、その結果が反つて發熱の原因を作るといふ事は、未だ氣がつかない事とは言ひ乍ら、洵に恐るべきであると言へよう。

## 痛 苦

痛苦即ち痛みなるものは如何なる譯であるかといふに、前にも述べた如く淨化作用の發熱によつて凝結毒素が溶解され、液体となつた毒素が、何れかに出口を求めて、その方向に進まんとするその運動が、筋肉の神經を刺戟する。それが普通の痛みの原因である。以上のやうな痛みの症状は、盲腸炎、急性腹膜炎、急性腎臟炎、頭痛、齒痛、中耳炎、



リヨウマチス、各種脚痛等、實に多種多様である。又、骨膜炎と名付けられてゐる骨に關する痛みの原因は、骨膜に凝結した毒素が淨化によつて溶解し、それが移動する場合、骨膜から筋肉へ進み刺戟するのである。

又、骨膜の表面にある毒結が、淨化溶解して表面へ進出せんとして、骨そのものに微微な穿孔をする。その竇の数は毒素の量によつて多少があるのである。勿論、その数の多いほど激痛である。肋骨カリエス、中耳炎、齒痛等其他骨髓炎といはれるものはそれである。此無數の穿孔ある場合、醫家は骨が腐るといふのであるが、それは誤りである。何と云へば、毒素が溶解除去された後は、舊通り完全になるからである。次に、特殊の痛み、例へば、手指の瘰癧、足指と其附近に於ける脱疽の痛み、痔瘻等の痛みは勿論、淨化作用による毒結の排泄であるが、之等は非常に猛毒であるから激痛である。之は第一淨化作用を俟たずに、第一、第二、兩淨化作用が同時に起るのであるから、淨化力旺盛な青年期に多いのである。之等の病氣に對して、醫家は漸次隣接部に移行腐敗するといふが、之も全然誤

謬である。私の多數の經驗によれば、或程度毒素が集溜すれば、それ以上増大する事は決してないのである。そうして、充分集溜腫脹して自然穿孔され、そこから濃汁毒血が排泄されて完全に治癒するのである。然し乍ら、その症狀は一見腐敗する如く見ゆるので、醫學に於ては、腐敗すると誤つたのであらうが、その爲に切脛手術を行ひ、一種の不具者になるのである。繰返していふが、私の水年の經驗によつて、脱疽と瘰癧は、腐敗はしない事をここに改めて斷言しておくのである。

次に、崑崙拳の痛みは別であつて、之は、胃病の部で説いてあるから、此所では略しておく。

其他、火傷や負傷等もあるが、之は病氣ではないから、時日の経過によつて、必ず自然に治癒するものである。もし痛みが永續するか、治癒しない場合は、その原因は消毒藥等の爲であるから、藥劑を廢して、患部を清水に洗ふだけで自然治癒するのである。

右の如く、病氣による痛苦には多種多様であるのであるが、その原因の殆んどが藥毒の爲



である。薬毒の種類によつて、痛みや症状が異なるのである。

そうして私の経験によれば、漢方薬は廣範圍である事と鈍痛が特色であり、洋薬は多く鋭痛で、稻妻型、針刺型、錐搦型等が多く、又局部的であるのが、特異性ともいふべきである。

特に、注射の薬毒は激痛の原因となることが往々あるのである。

次に、薬毒以外尿毒の痛みもあるが、之は多く輕痛である。又、然毒は殆んど痛みがないので、醫學は先天性微毒と思ひ誤つたのであらう。

### 搔 癢 苦

人体に於ける痛みの苦痛は、誰も知る所であるが、搔痒の苦痛は体験者でないと判り難いであらう。實に病的搔痒苦は、痛みに劣らぬ苦しいものである。此疾患の原因としては薬毒、然毒、食餌中毒の三種であつて、其中薬毒に於けるものから説いてみよう。先づ、

搔痒病として、最も一般に知られてゐるものは彼の蕁麻疹である。此病氣の原因の殆んどはカルシウム注射である。此注射を行つた者は必ず多少の蕁麻疹發生を見るのである。注射後早きは一年位、普通二三年位、長きは五六年を経て現はれるものである。然るに、醫療は蕁麻疹を治療する場合、カルシウム注射を行ひ、一時は多少の効果はあるが、時を経て必ず再發するのである。元來、中毒的症狀に對しては、その中毒の原因である藥劑を用ふるに於て、一時的効果はあるもので、彼のモヒ中毒患者が、モヒによつて一時的苦痛を免れるといふ事と同様で、これは誰も知る處である。故に、蕁麻疹は、薬毒が淨化作用によつて、皮膚面から排除せられるのであるから、或期間苦痛に耐えて、放任しておいても治癒するものである。そうして蕁麻疹の症狀は人によつて種々あるが、何れも搔痒苦が伴ふから判り易いのである。又、アンチピリン中毒、或種の注射藥等に因る事もあるが何れも自然に治癒するものである。

次に、蕁麻疹に似而非なるものに、一種の發疹的病氣がある。蕁麻疹の粟粒的なるに對



し、之は粒状が稍々大きく、重症は豆粒大のものさへある。之は、輕症は局部的であるが重症は全身的に及ぶものもあり、搔痒甚しく、斷えず稀薄なる膿汁を排泄し、稀には、膿汁が局部的に集溜腫脹するものさへある。そうして経過は頗る長期間に涉り、早きは半年位より、長きは數年に及ぶものさへある。最重症患者に於ては、苦痛のあまり自殺を想ふものさへあるといふ、實に怖るべき疾患である。そうして治療後と雖も、多くは局部的に残存し、全治する迄に數年を要するものである。

此病原は全く陰化然毒であつて、眞症天然痘が急性であるに對し、之は慢性天然痘ともいふべきもので、種痘の爲淨化を弱められたる結果である事は勿論である。故に、重症患者の最盛期に於ける皮膚面をみれば、天然痘に酷似してゐるのである。

次に、魚類中毒に因るものに、*Scabies* 疥癬的症狀がある。これは、局部又は全身的に紅潮を呈し、發熱、發疹、搔痒苦があるが、二三日で必ず治療するのである。これ等は勿論、食餌中毒で、腸に關係があるが、之を誤つて、醫家はカルシウム中毒による疥癬疹へ對し

ても、原因は腸にありとなし、腸の療法を行ふが、的外れであるから、何等の効果はないのである。

#### 不快感及び嘔吐

爰に、不快感といつても種々あつて、其症狀は一定してゐないのであるが、重なる症狀を記せば、嘔氣、痙攣、惡寒、鉛車の酔、濛朧感、焦燥感等であらう。そうして最も多いのは嘔氣であらう。此症狀は、原因としては腦貧血に因る胃の反射作用と、高热、食物中毒及び藥劑中毒、溜飲、幽門狹窄等である。

右の内、最初の三つは説明の要はあるまいから、後の三つに就て説明してみよう。即ち藥劑中毒に因る嘔氣は、藥液が胃の粘膜から一旦吸收されて、胃の周圍に浸潤滯溜したものが、時日を経て毒素となつて胃に還元し、胃中に凝結する。それが淨化作用によつて溶解し、嘔氣を催し嘔吐するのである。其際嘔吐の液が服用した藥劑の臭ひがするのである



次に、溜飲は胆汁の排泄であるが、之は、不斷に胃中に流入しつつある胆汁が、食物の停滞又は藥劑の妨害に遇つて、消化を援けるといふ役目に支障を來し、排泄嘔吐するのである。

次に、幽門狹窄に因る嘔吐は、胃によつて消化されたものが腸に流下する場合、狹窄の爲通過し難いので、逆に上方に戻らうとする。それが嘔氣となるのである。故に、此症狀は固形物は不可であるが、流動物なら嘔氣が起らないにみて瞭かである。それは、幽門狹窄に因る流下孔が狭くとも、流動物なら通過するからである。

### 下痢

下痢は最も多い症狀であるが、先づ急性と慢性とに區別される。急性は、飲食物による中毒即ち、食あたり、が多いのである。世間よく、寢冷によつて起るといふが、之は殆んど誤りで、冷によつて下痢をするといふ事は極稀である。食あたりの下痢の際、藥劑等に

よつて止めようとするが、之は不可であつて、自然に排泄させるのが本當である。

次に、急性下痢症に、食あたり以外に、俄然として起る頗る猛烈な下痢がある。これは一日十回以上、甚だしきは數十回に及ぶものさへあつて、卒には屢敷をかぞへられぬ程で患者が意識出來ない程、水便を漏すものさへある。そうして血液が混入して腐肉が下るかと思はれるやうな下痢もあるが、之等は悉く膿や毒血の凝結したものが、猛烈な淨化作用によつて排泄されるので、決して肉や臓器の一片だも排泄せられるのではないのである。斯ういふ猛烈な下痢は、老人には殆んどなく青少年に限るといつてもいいのであるから、旺盛なる淨化作用である事は明かである。故に、放置しておけば必ず治癒するのである。然るに、之等猛烈な下痢の場合、醫家も患者も非常に恐怖し、停止せしめようとする。然るに停止療法を行へば悪化するのが當然であつて、其爲、死を招く恐れさへあるから注意すべきである。

次に、慢性下痢があり、それが數ヶ月乃至數ヶ年に及ぶものさへある。醫家は多くは、



結核性となし、怖れて停止療法を行ふが、之も非常を誤りて、事實は、腹膜に溜結せる膿が、援慢な浄化作用によつて僅かづつ溶解され、下痢となつて排泄せられるのである。此膿は、腎臓萎縮による尿毒が、常に腹膜へ集積するのであるから、腎臓を健全にしなくては、完全に治癒され得ないのは勿論である。然し乍ら、非常に長年月放置しておけば、腎臓萎縮が自然に治癒されるので、腹膜も治癒され、下痢も無くなるのである。

#### 浮腫及び盗汗

浮腫は、其原因として二種ある。それは、腎臓及び膀胱の支障である。そうして腎臓が原因の場合は、腎臓疾患の説明中にある如く腎臓萎縮に因る餘利尿が原因であつて、輕きは局部的、重症は全身的に及ぶのである。

又、浮腫が左右孰れかに特に多い場合がある。それは、浮腫の多い部の腎臓が萎縮してゐるのである。そうして浮腫の殆んどは、腎臓萎縮が原因であるが、稀には膀胱が原因で

ある事もある。それは輸尿管末又は膀胱から尿が尿道へ通下の口許に、粒狀膿結が聞える場合、尿の通流に支障を來し、浮腫の原因となる事がある。然し、何れにせよ兩者共、毒素溜結を溶解するに於て、容易に而も完全に治癒さるるのである。

茲に面白いのは慢性浮腫である。之は急性は直ちに判明するが、慢性に到つては不知不識の間に溜るので、醫家は勿論、本人さへ氣がつかないのである。そうして慢性浮腫は、漸次的に數年又は數十年に及んで、皮下に凝結するのであつて、肥満した人に最も多いので、斯の如き人は、病的肥満であるから、常に故障が起り易いのである。それに就て斯ういふ滑稽な事があった。それは、女學生で非常に肥満し、而も固肥りで、一見体格優良者に見えるので、學校醫健康診断の結果、其縣下に於ける模範健康者三人の中に選ばれたのであつた。然るに、偶々胸部に痛みが発生し、全身的重倦く、腹部が張り、腰が重いといふので私の處へ來た。診査してみた所、驚くべし、前述の如き全身的浮腫の凝結した肥満なのであつた。それで治療の結果、急激に尿量が増し、体重二貫目以上減じて、眞の健康に



なつたのである。斯様な症状は相當多いのであるから、健康そうにみえる体格の持主と雖も大いに注意すべきである。

又、浮腫の患者であつても、尿に蛋白のない場合、醫家は、原因は腎臓でなく心臓にあるといふが、之は馬鹿々々しい程の誤りであつて、心臓は尿とは關係がないのである。之等は蛋白のみによつて腎臓病の有無を診断する爲であつて、無蛋白腎臓病の存在を知らないからである。

次に、盗汗は、醫學の解釋では、衰弱の爲としてあるが、之も全然反對である。即ち、淨化作用旺盛の結果であるから、盗汗のない患者も、治療するに於て盗汗がおこり、それから恢復に向ふに鑑ても、淨化作用である事は事實である。又、老人には少なく、青壯年に多いにみても右の理は瞭かである。

序であるから、發汗に就て述べてみよう。大体健康者發汗が多いのであつて、弱体者は少ないか又は全然ないのが普通である。然るに局部的發汗者がある。こういう人は大抵

右か左の一方的であつて、それはその側の腎臓が萎縮してゐるのである。それが爲、常に輕微な尿毒がその部に集溜する。それが汗となつて排泄せらるるのである。又、發汗すべき理由がなく不用意に發汗する人があるが、之も右と同様の原因で、病的であるのである。

#### 眩暈及び不眠症

眩暈は非常に多い病氣であるが、醫學では全然不明とされてゐる。然し、この原因は、實に簡單明瞭である。

眩暈には二つの原因がある。一つは、右側後頸部延髄附近に毒素の溜結があつて、それが眼球へ送流する血管を壓迫するのである。即ち眼が物体を視るといふ事は、視神經の活動であるが、その活動のエネルギーは、絶間なく送流する血液があるからである。然るにその送血管が、毒素固結の爲壓迫される場合送血量が減少するので、その血量減少の利邦視神經が弱り、視力が薄れるといふ譯である。右の毒素の固結は、第一淨化作用によつて



固結が強化されるのであるが、その作用が不定的であるため、その都度視力が弱り、又、強まるといふやうに、利邦的間歇的である爲それが眩暈の症状となるので、此原因が最も多いのである。

今一つは、前額部から眼球附近に滯溜する毒素の淨化作用として、常に微熱が發生するのである。その微熱が視力を動搖させるのでそれは丁度、發熱や頭痛の際、又は酒に酔つた時、又はストーブや焚火の火に直射した時眩暈するのと同様の理であるが、之は至つて少ないのである。

次に、不眠症であるが、此原因も簡單明瞭である。之は、眩暈の原因と殆んど同一であつて、眩暈の固結は間歇的であるが、之は、そういふ事がなく、定状的に血管を壓迫し、腦貧血を起すのであつて、此原因による腦貧血は神經過敏症になり、それからそれへと、物を考えがちになるのである。故に、私が治療の頃、右の溜結毒素を溶解するに於て、適確に短時日に快癒し、例外なく全部成功したのである。

#### 憂鬱感及び麻痺と極變

憂鬱感には、種々の原因と種々の症状があるが、最も多いのは頸部及び肩の凝りに因る事である。之は、其項目にある如く、凝りの壓迫によつて腦への送血が減少し、腦貧血になる爲である。

爰に面白いのは、幼兒が常に機嫌がわるく憤かる事で、醫家に於ても、原因がさらに判らないので困難するのであるが、それ等は大批、肩が凝つてゐるのである。幼兒のくせに肩が凝るとは不思議に思ふであらうが、事實であるから致し方ないのである。此場合、肩を治療するや、忽ち氣嫌が治り、普通状態になるに察しても明かである。又前頭部及び後頭部等に毒素があり、その淨化作用の微熱が常にあるため、憂鬱の原因となる事もある。次に、胃の附近に毒素があり、その淨化作用の微熱に因る事もある。そうして此症状の原因としては樂毒が多いが、稀には靈的原因もあるから、之は靈的病氣の項目に譲る事とする。



次に、麻痺は種々の原因と症状があつて、最も多いのは脚氣であるが、之は脚氣の項目に譲る事とする。其他の麻痺としては、注射の原因による藥毒（之は手指に多いのである）と手術後疵が治癒してから、其附近に麻痺のある事がある。之等はいづれも放置しておけば時日を経るに従つて僅か宛自然治癒するものである。又、中風が原因で局部的に麻痺する事がある。之は容易に治癒し難いものであるが、罕には自然治癒するものもある。

次に、痙攣には二種の原因がある。一は、最も急激な淨化作用であつて、それは急性高熱の場合、特に腦疾患に多いのである。又、胃痙攣、腸痙攣等も急激の淨化作用である。そうして、幼兒の痙攣の場合、その苦惱の強烈なる爲、危険をさへ感ずるのであるが、痙攣が致命傷となる場合は殆んど無いといつてもいいので、大抵は時間を経れば恢復するものである。

次に、今一つの原因は、靈的であるからその項目に説く事とする。

### 咳嗽及び逆上

咳嗽は、曩に詳説したから、茲では二三補遺として説くが、咳嗽の原因は身体凡ゆる局部にある事は既に説いた通りである。そうして醫學が、咳嗽の原因を咽喉が悪いとしてゐるのは、あまりにも見當違ひである。故に咳嗽を止めようとして吸入法を行ふが、無効果である事も、既に述べた通りである。但だここでは強い咳嗽と弱い咳嗽の原因を述べてみるが、強い咳嗽とは、喀痰の濃度であるのと、喀痰の多量であるため、吸引に力を要するからである。それに反して軽い咳嗽は、喀痰の稀薄と少量なるためである。軽い咳嗽の場合、全然喀痰をみない事もあるが、之は微粒であるからであつて、斯様なのは大抵、咳嗽後相當の時間を経て、少量の喀痰があるものである。

そうして、咳嗽の原因である喀痰は、意外な局所から出る事がある。それは脚部又は頭腦及び顔面であつて、之等は醫學では想像もつかないであらうが、私が治療の際、右の部



の毒素溶解法を行ふや、間髪を容れず咳嗽が出るにみても、疑の餘地はないのである。

次に、逆上とは如何なる原因であるか、之も世人が考えるやうな、血液が逆上するのではないので、顔面部に溜結せる毒素の淨化作用としての、其部の發熱である。勿論、紅潮を呈するのは熱の爲であつて、右の毒素を溶解するに於て、治癒するのである。

#### 冷及び便秘

冷の原因は、局部的發熱又は局部的毒素溜結の爲である。多くは腰、下腹部、脚部、足の指先等であるが、それ等局所に滯溜する毒素の淨化作用の發熱によつての局部的惡寒なのである。然るに、全身的惡寒の場合は惡寒として感ずると同じ意味に於て、局部的の場合には冷として感ずるのである。故に、全身的惡寒の際、何程衣類を重ねても暖くならないと同様、下半身が冷ゆる場合、婦人などは、何枚もの腰巻を巻いても猶冷ゆるといふのは右の理に由るからである。唯だ膝下から爪先へかけて非常に冷い人がある。之は毒素溜結の爲

血液不循環であるのに對し、右の部は空氣に晒され易い爲、冷却が慢性的となつてゐるからである。

次に、便秘症は非常に多く、何年も何十年も苦しむのであるが、此原因は腹膜即ち臍の周圍から下腹部へかけて毒素溜結があり、それが糞便の通路である直腸を壓迫するのでその爲、通路が狭少となり、硬便は間へて通り難くなるのである。故に、右の毒素を溶解するに於て容易に治癒するので、私が治療の際、例外なく治癒したのである。

又、便秘症の人は下劑によつて辛くも目的を達するが、之はどういふ譯かといふと、人間は飲食物に毒分のある場合中毒し、嘔吐又は下痢を起すのである。それは自然淨化による排泄作用である。下劑は此理を應用したもので、即ち、中毒作用を起す藥劑を服用するので中毒を起し、それが下痢即ち液体便となり、それが猶も硬化せる宿便を液体化し押出すので、狭少なる直腸も、液体なるが故に通過し易くなるのである。然し、右の理によつて下劑を長年月持續するに於て、其中毒による害も輕々に出來ないので、腎臟病其他種々



の病原となり死の原因となる事もある。

又醫學に於ては、便秘は病氣の原因になるやうに思つて頗る恐れるのであるが、之も、大いなる誤りである。私の實驗によれば、嘗て四拾餘歳の男子の胃癌の患者があつて、二ヶ月位の治療で全快したのであつたが、治療期間中、貳拾八日間、便秘が無かつた事があるが、病氣に對し、その爲の影響は聊かもなかつたのである。其人は今も健康で、農業に従事してゐるやうである。其後扱つた一人の患者の話によれば、その人は二ヶ月間便秘した事があつたといふ。又今一人の患者は六ヶ月間便秘したといふしそれでも右兩人共何等異常は無かつたといふ事であつた。之等によつても便秘なるものは、些かも悪影響のあるものでない事が判るであらう。

次に、醫學に於て、便秘を放任しておくとか自家中毒なるものが發生し、それが何等かの病原になるといふのであるが、之も誤りである。如何なる理由からそういふ説がおきたものであるか。多分宿便が血液中にでも侵入するやうに想像したのであらうが、私は人体内

の真相が判明したならば、自家中毒なる言葉は消滅すると思ふのである。

### 既存療法

病氣治療の方法として、今日行はれてゐる種々の療法に就て一通り解説してみよう。

先づ、西洋醫學に於ける治療法は、藥劑其他の方法を以て、淨化作用停止である事は、讀者に最早充分諒解されたであらう。然し、未だ言ひ残した事があるから今少しく述べてみよう。

私の經驗上、最も怖るべきは注射療法として、彼の六百六號一名サルバルサンがある。之は周知の如く、驅梅毒法として、一時は、實に救世主の如く思はれたが、何ぞ知らん、事實は恐るべき結果を來すものである。そうして此藥劑は人の知る如く、原料は砒素劑であつて、同劑は耳掻き一杯で、人命を落すといふ程の猛毒であるから、注射するや一時的淨化作用停止の力は強烈なものである。即ち梅毒性發疹や腫脹に對し、同劑を注射するや



忽ちにして消滅するから、一時治癒したやうに見へるのである。然し、實は潜伏毒素が、淨化作用によつて、皮膚面に押出されたのが同劑の注射によつて、淨化作用は停止し、毒素は淨化作用以前の潜伏状態に還元するのである。それだけならいいが、右の砒毒は、不漸の淨化作用によつて、漸次体内の一局部に集溜するのである。その集溜局所として、最も多きは頭腦で、砒毒が頭腦に集溜する結果は、大抵精神病は免れないのである。その際醫家は誤診して腦微毒といふが、何ぞ知らん、實は羅徹療法の結果であるといふに至つては、何と評すべきや言辭は無いであらう。近來、精神病激増の傾向があるが、私は六百六號の原因による事も尠くないと思ふのである。次に、恐るべきは、六百六號に因る眼疾であるが、大抵は失明するのであつて、此症狀は殆んど片眼で治癒に頗る困難である。尤も醫家により眼疾のある患者は悪化するとして、同劑の注射を見合す由である。其他種々の病原となる事は明かであつて、私の經驗上、同劑注射の經驗をもつ患者の病症は、特に治癒に時日を要するのである。

次に私は、醫家は固より、世人に一大警告をしなければならぬ事がある。それは豫防注射の藥毒による腫物である。近來、足部特に膝下の部に大小の腫物が出来る人が多い事は人の知る所であらう。之は、豫防注射の藥毒が時日を経て足部に集溜し、淨化作用によつて排除されんとする爲である。之等は放任しておけば短期間に治癒するのであるが、それに氣が付かない爲、藥劑を使用するので、それによつて相當長期間に渉るのである。そうして不幸な人は、醫療によつて藥毒を増加される爲、悪化して終に足部を切斷されるやうになる事も、稀にはあるのである。

又、注射液によつては、瘰癧及び脱疽の原因となる事もあるから注意すべきである。そうして、之等も手術によつて大小の不具となるのは勿論である。

次に、利尿劑の逆作用も注意すべき問題である。先づ腹膜炎患者が尿水の爲、腹部膨滿するや、醫療は唯一の方法として利尿劑を用ふるのである。それが爲、一時は尿量を増し腹部縮少して、輕快又は殆んど治癒する事があるが、それは一時的であつて、例外なく再



び膨滿するのである。従而、復利尿劑を用ひる。復縮少するといふ譯で、斯の如き事を繰返すに於て、終には利尿劑中毒となつて、逆効果の爲、腹部は彌々膨滿し頗る頑固性となり、減退し難くなるので、醫家は止むを得ず穿孔して排水するのであるが、その殆んどが結果不良で斃れるのである。右の如く利尿劑による逆効果の起つた患者は、その利尿劑服用の多い程、治愈に時日を受するのみでも利尿劑使用は戒むべきである。

又、畢丸水腫といふ、畢丸の膨脹する病氣や、尿の閉止する症狀等も、利尿劑の逆効果による事が多いのである。

次に、神瘧痛の如き、強烈な痛みが持續する場合、モトの注射によつて一時的苦痛を免れるのであるが、之も多くは繰返す事になるので、其場合、非常に食慾を減退させ、それが愈上進むに従つて、終に瀕瀕なる嘔吐を催し、食慾の減退甚だしく、衰弱によつて畢に斃れるのである。

次に、チフテリヤの注射は、同病に卓效ありとせられ、豫防に治療に近來大に行はれ

てゐるが、之等も未だ研究の餘地は多分にあるのである。私の研究によれば、此注射によつて惡結果を蒙つた者は、あまりにも多い事である。甚だしきは死に到つたものさへ尠くなかつたのである。そうして中には一週間位昏睡状態に陥つて、覺醒後、精神變質者になつたものや、胃腸障礙を起したり、神經衰弱的症狀になつたりして、而も頗る頑固性であるから、數年又は數十年に及ぶものさへあるのである。故に假令、チフテリヤに効果があるとしても、惡作用と比較して、功罪何れが勝るや疑問である。

同病は本療法によれば、十分乃至三十分位の一回の治療によつて、完全に治愈するのである。

次に、今日廣範圍に使用するものに沃度劑がある。この沃度劑の中毒も恐るべきであつて、これが頭痛の原因となり、神經衰弱、胃病、腎臟病等、種々の病原となるのである。人により、發作的痙攣を起したり、手足の運動不能の原因となる事もあるが、醫家は勿論世人もあまり知らないやうである。



次に、外傷等に於ける殺菌用として使用する。沃度ホルム劑は、もつとも恐るべきものである。よく手術のための外傷が、治癒に頗る時日を要することがあつて、その場合、醫家は不可解におもふであらうが、これは全く消毒藥の中毒であるから、藥劑を緩し、清水で洗ふだけにしておけば、速かに治癒するので、私はしばしば經驗して好結果を擧げたのである。そうして、沃度ホルムが何故恐るべきかといふに、この藥が外傷部の筋肉から滲透する時、患部の周囲またはその附近に、青白色の膿狀斑點が出来るのである。そうして、それが漸次擴大して、その状態が宛かも腐りゆく如く見ゆるので、醫家はそう信じ驚いて、手足の場合切斷を奨むるのである。而も、強烈に痛むので、その苦痛を免れんため患者も終に切斷を受ける事になるのである。即ち、放置しても治癒する位の外傷が、沃度ホルムといふ藥劑によつて、不具にまでなるといふに至つては、全く驚くの外はないであらう。故に今日戦傷勇士が、よく手や足を切斷するといふことを聞くが、その多くが、沃度ホルム中毒のためではないかと、私は推斷すると共に、そうであるとすれば憂ふるの外

ないのである。

故に一言にしていへば、外傷に、微菌の侵入するを恐るる結果、殺菌作用を行ふのであるが、その殺菌作用が、微菌の侵入よりも、幾層倍恐るべき結果を招來するといふ事になるので、全く角を矯めて牛を殺すといふ類である。

次に、濕布藥及び膏藥に就て説明してみよう。之等も皮膚から藥毒を滲透させるので、その部面の淨化作用を停止するから、一時的苦痛は輕減するが、その藥毒が殘存して種々の悪影響を來すのである。私が經驗した二三の例を擧げてみよう。脊部が凝るので、數年に涉つて或有名な買藥の膏藥を持続的に貼用した患者があつた。然るに、その藥毒が漸次脊柱及びその附近に溜着して、凝りの外に激しい痛みが加はつて來たのである。これは全く膏藥中毒である事が明かになつた。又或患者で顔面に普通のニキビより稍々大きい發疹が、十數年に涉つて治癒しないで惱まされてゐたのがあつた。之等も最初、普通のニキビを治そうとして、種々の藥劑を塗布し、それが浸潤してニキビが増大し、頑固性になつた



のである。次に又、最初一局部に濕疹が出来それへ藥劑を塗布した爲、その藥液が滲潤し藥毒性濕疹となり、それが漸次蔓延しつつ、遂には全身にまで及んだが、それでも未だ氣づかないで、醫療は塗布藥を持続するので、極端に悪化し、皮膚は糜爛し、紫黒色さへ呈し、患者はその苦痛に呻吟しつつ全く手が付けられないのであつて、私は、醫學の過誤に長大息を禁じ得なかつたのである。

其他、頭痛に對する鎮靜劑や、不眠に對する睡眠劑、鼻孔閉塞に對するコカインの注入等の中毒は、周知の事であるから省くこととする。

次に、漢方藥であるが、之も洋藥と同様中毒を起すのであるが、只だ洋藥の如くその中毒が強烈でない事が異ふのである。又その症狀も、洋藥の如く複雑ではないので、それは漢藥が殆んど新藥が出ないから、種類も少なく、舊套墨守的である爲であらう。そうして漢方藥中毒の最も多い症狀としては食慾不振及び嘔吐である。此嘔吐は常習的であつて、大抵は一回の嘔吐で平素通りになるのである。然し、實際の嘔吐は一種の臭ひがあるが、

それは、以前服用した漢方藥の臭ひであるにみても中毒である事が知らるるのである。

そうして漢方藥中毒者は、腎臟疾患が多く顔色暗黄色で、何となく牙を食いもののである。之に就て私は、支那人の顔色は赤味がなく、青黄色が多いのは、祖先以來、漢方藥服用の結果であると惟ふのである。

そうして、洋藥も漢藥もそうであるが、多くを使用した者ほど皮膚は光澤を失ひ、彈力なく、胛壯年者にして老人の如き状態を呈するのである。然るに、斯の如き人と雖も、藥劑を廢止するに於て、年々藥毒的症狀が消へるに従つて若返るのであるにみて、此點に於ても、藥毒の悚るべき事が肯れるであらう。

次に、電氣及び光線療法であるが、之も、概略説明してみよう。此療法の本質は、毒素を固結させるのであるから、病原である毒素溶解作用を停止するのみならず、寧ろ淨化作用が發生以前よりも固結が強化されるので、從而容積も著しく減少し、或程度治癒したと思ふのであるが、實際は固結させたので、最初の病氣發生の苦痛とは違つた苦痛が生ずるので



ある。それは最初の病氣症状は、毒素溶解作用の苦痛であるが、後の症状はその反対である固結の爲に支障を及ぼす苦痛で、その位置により苦痛は一定してゐないので、位置によつては苦痛のない事もあるのである。

然し乍ら、死に直面した重症に對し、電氣療法によつて起死回生の偉効を奏する事も聞くが、固め療法も其症状によつて適合する場合、効果は確かにあらう。そういう人は電氣療法を讀へるのである。然し乍ら、私の經驗上、レントゲン療法は悪いのである。之は、最も能く毒素を固結させるからである。

次に、水冷及び濕布療法は幾に述べたから略すが、咳嗽に對して吸入療法を行ふが、之は實に馬鹿々々しいのである。何となれば、幾に説いた如く、咳嗽の原因は咽喉ではないから、吸入法を如何程行ふも何等の効果はないのである。

又、温めるといふ温熱療法があるが、之も病氣により一時的輕快を得る事があるが、病氣により反つて悪化さす事もあるのである。又感冒の際、全身を温めて發汗さす事を良いとしてゐるが、之も誤りで、發汗さすよりも自然に放置しておく方が、反つてよく治癒す

るのであつてすべて自然が良いのである。次に癌に對しラヂウム放射を行ふが、之も何等効果はないのである。その説明として私は唯一の事實を挙げるにとどめる。それは彼の東郷元帥の喉頭痛に對し、その當時三十五萬圓のラヂウムを使用したに關はらず、半ヶ年にして生命を失つたことである。

### 鍼灸療法

近來、一時類れたかにみえた灸療法が復活し、相當の流行を見るに至つた事は周知の事實である。之は全く西洋醫學の無力に起因する事は勿論であるが、之に就て私は説明してみよう。之は病原である毒素溜結に對し、皮膚の火傷によつて毒素を誘導するのである。丁度、火傷の際、そこに膿が集溜するのと同じの理であつて、大きな火傷はその苦痛と、治癒してから醜痕が残るので、分散的に小火傷を數多くさせる譯であるから、毒素もその小火傷へ分散的に集溜するので、一時的輕快するのである。故に、時日を経るに従ひ、再



び毒素は還元するから、灸は据え初めたら、毎月又は一年に何回といふやうに持續しなればならぬといふのは、右の理に由るからである。然し、藥劑と異ひ、中毒は残らないから健康には差支へないが、施術の際の苦痛は勿論、茲に見逃す事の出来ない事は、皮膚に醜痕を残す事である。元來人間は、造物主の最傑作品で、美の極致であるといつてもいいのである。特に女性の如きは、その皮膚の美を讃へ、日本に於ては玉の膚ともいひ、泰西に於ては、女性の裸体が最高の美とされてゐるにみても知らるるのである。それに対して、人爲的に火傷の痕をつくるといふ事は、皮膚の不具者となる事であつて、神に對し、冒瀆の罪は免れないと思ふのである。

次に鍼療法なるものは、血管を傷け、内出血をさせ、其凝血によつて、一時的淨化作用停止を行ふものであるから、根治療法ではないのである。

### 病氣と醫學の誤謬

西洋醫學に於ける根本的誤謬は、事實を基礎として理論的には充分説いたつもりであるが、猶重なる病氣に對し、實證的に検討してみよう。

#### 一、扁桃腺炎、盲腸炎、手術

現代醫學の診斷に於て、誤診の頗る多い事は、多數の患者を取扱はれた經驗豊富の醫家はよく知つてゐる筈である。何よりも醫科大學に於て、診斷と解剖の結果とを照合してみれば、思半ばに過ぎるであらう。先づそれ等に就て、事實によつて順次解説してみよう。近來、最も多い病氣として扁桃腺炎なるものがある。此病氣は大抵の人は經驗してゐる筈であるから、先づ之から採り上げてみよう。

元來、此扁桃腺なる機能は如何なる役目をしてゐるものであるか、又扁桃腺炎なるものは、如何なる理由によつて發病するものであるか、恐らく醫學に於ては未だ不明であらう



何となれば、手術によつて除去するのを最上の方法としてゐる位だからである。そうして手術の理由としては、扁桃腺は不必要であるばかりではなく、反つて有害を存在であるとしてゐる。故にもし醫學で言ふ如きものとすれば、それは人間を造つた程の偉大なる造物主が、無益にして有害なる機能を造つたといふ譯である。醫學が不必要視するものを、造物主は必要とされたのである。一といふ事は洵に不可解極まる話ではあるまいか。假にそうだとすれば、造物主の頭腦よりも醫學者の頭腦の方が優れてゐるといふ事になる。造物主即ち神よりも、人間である現代の醫學者の方が上位であるとは驚くべき滑稽である。然るに實は、醫學者と雖も、造物主に造られたのではないか。醫學者が如何に學理を以てするも、一本の睫、一ミリの皮膚さへ造り出す事は到底不可能であらう。故に、扁桃腺が不必要といふのは、その存在理由が未だ判明しないに關はらず、判明したやうに錯覺した結果が手術を生んだといふべきであらう。

然らば、扁桃腺なるものは何が故に存在するのであるか、私の發見によれば、非常に重要なる使命を果してゐるのである。それは人体に於て、最も毒素が集溜し易いのは頭部淋巴腺附近である。そうして此集溜毒素は、淨化作用によつて排泄されなければならぬので、曩に説いた如く、第一淨化作用によつて一旦扁桃腺に毒素が集溜し、凝結し、それが第二淨化作用の發熱によつて溶解し、液体となつて排泄せらるるのである。即ち、扁桃腺は、毒素の排泄口である。此理によつて、扁桃腺の起つた場合、放置しておけば、淨化作用が順調に行はれ、普通二三日で治癒するのである。然るに醫療は此場合、ルゴールの塗布や氷冷、濕布、下熱劑等によつて、淨化作用の停止を行ふから、淨化作用と其停止との摩擦を起し、治癒迄に相當の時日を要するといふ事になる。そうして一時治癒したとしても、實は眞の治癒ではなく、淨化發生以前に還元させた迄であるから、扁桃腺固結は依然としてゐる。然し、そればかりではない。其後に集溜する毒素が加はつて、固結は漸次増大する。再び淨化が起る。復淨化を停止し還元させる。斯様な事を繰返すに於て慢性症となり、固結は愈よ膨大する。之を扁桃腺肥大症といふのである。そうして、手術除去を應



めるのであるが、何ぞ知らん、除去しなければならぬ程に膨大させたのは、醫療の結果であるのである。そうして、此様に膨大した扁桃腺は、發病するや激烈なる淨化作用が起るから、高熱は勿論の事、患部の腫脹甚だしく、喉頭は閉鎖され、甚だしきは、水一滴さへも飲下する能はざる程に在るのである。斯様な悪性扁桃腺炎を恐るるが故、除去を勸むるといふ事に在るのである。然るに自然治療によれば、扁桃腺炎は、一回より二回、二回より三回といふやうに、漸次輕症となり、畢に全く扁桃腺炎は發病しない事に在るのである。

茲で、腦貧血に就て一應説明しておかう。之は扁桃腺炎に關係があるからである。それは假に、頸部淋巴腺に集溜する毒素が、その排泄口である扁桃腺が失いとしたならどうなるであらう。それは其儘淋巴腺附近に停溜固結する。その固結が頭腦に送血する血管を壓迫するから、頭腦が不足する。それが腦貧血であり、神經衰弱でもある。頭腦が濃縮とし壓迫感や不快感等の患者が、近年非常に多いのは、全く右の如きが原因であることも尠く

ないのである。

そればかりではない。扁桃腺を固結させるか、又は除去した場合、淋巴腺集溜毒素は出口を他に求めるの止むなきに至る。それは、反對の方向に流進して排泄されようとする。即ち耳下腺を通つて中耳に到り、鼓膜を破つて排泄されようとするのである。其際、高熱によつて液体化した毒素は耳骨を穿孔しようとする。その痛みと發熱を中耳炎といふのである。近來、中耳炎患者の増加したのも全く右の理由にもよるのである。扁桃腺炎なら、輕症で済むべきものを、醫療はより重症である中耳炎にまで發展させる譯である。そうして中耳炎の場合必ず氷冷法を行ふから、液体毒素は方向を轉換するのである。即ち中耳に向つて流進してゐたのが、頭腦に向つて轉進するのである。之を醫師は、中耳炎に因る腦膜炎といふのである。斯様に、扁桃腺炎を中耳炎に發展させ、終に腦膜炎まで起させるといふのは全く驚くべきである。

次に、盲腸炎に就て説明してみよう。之も近來非常に多い病氣であつて、扁桃腺炎と同



じく手術除去を奨めるのである。そうして醫學では多く食物に原因を置いてゐる。彼の、葡萄の種が原因といふ學説であるが、私は何時も嘔ふのである。葡萄の種位で盲腸炎が起るとすれば、柿の種や魚の骨など嚥下したら即死するであらう」と

そうして醫療に於ては、最初氷冷によつて淨化を停止し、還元させようとするか乃至は直ちに手術を行ふのである。そうして速かに手術せざれば化膿し、蟲狀突起が破れて急性腹膜炎を起すといふが、之も誤りである。そうして、盲腸手術の結果、豫後良好で、健康時の状態となつたとしても、慢性腹膜炎及び腎臓病が起り易くなるのである。それ等は、如何なる譯であるか。左に詳説してみよう。

抑々、盲腸炎の原因は何であるかといふとそれには先づ、盲腸なる機能の役目から説かねばならない。身体不斷の淨化作用によつて下半身の毒素溜結個所として、盲腸部は上半身の扁桃腺と同じ様を意味である。即ち、第一淨化作用によつて盲腸部へ毒素が溜結するのである。實際同部を指頭にて壓診すれば、大小の痛みを感じるのである。そうして重痛

は毒素溜結が強度に達し、盲腸炎即ち第二淨化作用の近づいた徴候であつて、輕痛は、毒素の溜結が輕度又は少量なる爲である。又實際盲腸部以外の腹部を壓診する時、痛苦があれば腹膜にも毒素溜結があつて、急性腹膜炎合併症の前兆である。然し乍ら茲で面白いのは、全身的に衰弱してゐる時は第二淨化作用は起り得ないもので、第二淨化作用が起り得るのは活力旺盛であるからである。故に過激な運動を行つた後など起り易い事と、青壯年時に起り易いといふ事はさういふ意味である。又第二淨化作用が起るまでに毒素が溜結するには、大抵數年乃至十數年の長時日を要するものであるから、幼兒又は小兒には殆んどないにみても明かである。

右の如き理によるのであるから、盲腸炎發生の際は放任しておけば容易に治癒するのである。即ち高熱によつて溜結毒素が液体化し兩三日經て下痢となつて排泄せられ治癒するのである。右の毒素溶解を醫學では化膿といつて恐れるのであるが、實は化膿するから治癒するのである。即ち化膿した時は下痢の一步手前であるから、半ば治癒したと見做して



可いのである。故に、盲腸炎發生時の養生法としては、一日斷食、二日目三日目は流動物四日目、五日目は粥、六日目から普通食で差聞へない迄に治癒するのである。そうして自然療法による時には、激痛は半日乃至一日位、輕痛二日間位で、四日目からは室内歩行が出来る位になるから、何等恐るべき病氣ではないのである。そうして自然治癒によれば原因である溜結毒素が全部排泄されるから、再發の憂は決してないのである。

又、腹膜炎併發は盲腸に直接關係はないのであつて、之は、腹膜部の毒素溜結が同時に淨化作用を起す爲である。其際醫療は手術を滙める事もあるが、之は豫後不良である。故に醫師によつては手術を避け、他の療法によつて淨化作用を停止し、還元させようとするのであるが、それには非常に長時日を要するので、其結果は漸次腹部の毒素は固結し、板の如くなり、其壓迫によつて胃腸障礙を起し食慾不振となり、衰弱甚だしく多くは斃れるのである。

之は、自然療法によるも、三日間位は激痛を堪え忍ばなければならぬし、其間、絶食

のやむなきに至るのである。然し、醫療によつて生命の危険に曝すよりも、必ず治癒するのであるから、三日や五日位の忍苦は何でもないのであらう。そうして其結果、猛烈なる下痢を起し、完全に治癒するので、普通二三週間位で治癒し、勿論、再發の憂は絶無である。茲で、手術に就て一言を挿む事とする。今日醫學の進歩をいふ時、必ず手術の進歩を誇るのである。之は一寸聞くと尤ものやうであるが、實は大いに間違つてゐる。何と云へば患部の機能を除去するといふ事は、人体に於ける重要機能を消失させるので、他に悪影響を及ぼすのは當然である。成程手術後一時的或期間は安全であるが、淨化作用の機關が失くなるかすれば、毒素は他の凡ゆる機能を犯す事になるからである。それは不自然な方法が齎す結果としてそうなるべきである。最も高級で、微妙極まる人体の組織であるから、假令聊かの毀損も全体に悪影響を及ぼさぬ筈はないのである。之を例へていへば、如何なる名畫と雖も、畫面の一部が毀損されるれば、それは全体の毀損であり、價値は大いに低下するであらう。又家屋にしても、一本の柱、一石の土台を除去したとしたり、直に倒れな



いまでも、その家屋の安全性はそれだけ減殺される譯である。そうして手術は、病氣の除去ではない。病氣と共に機能を除去するのであるから、如何に理由づけようとしても、醫術の進歩とはならないであらう。私は眞の醫術とは、病氣そのものだけを除去して、機能は以前のまま、生れたままの本來の姿でなくてはならないと思ふのである。そうして手術は外部即ち指一本を除去するとすれば不具者として恐れられるが、内臓なるがため直接不自由と外觀に影響しないので左程恐れられないのである。故に私は惟ふ、手術が進歩するといふ事は、醫學が進歩しないといふ事である。即ちメスによつて患部を缺損させ治病の目的を達するといふ洵に原始的方法を以て唯一としてゐるからである。此意味に於て、今日稱ふる手術の進歩とは、醫術の進歩ではなく、技術の進歩であると、私は言ひたいのである。

## 二、胃 疾 患

日本人に最も多い病氣に胃病がある。此病氣は世人も知る通り種々の症状があるが、最一進一退の経過をとりつつ、終に、悪性に移行するといふのが大部分である。

故に、一度此病氣に罹るや、輕症でも全治するのは極稀である。そうして最初は消化不良、胸膈、胃痛等の輕い症状である。以上詳細に説明してみよう。

消化不良の原因は、先天的には然毒、後天的には尿毒、藥毒及び食餌の方法の不適正等によるのである。そうして始め、右の然毒又は尿毒が胃の外部に集溜し、それが漸次固結となつて胃を壓迫する爲、胃は萎縮して活動が遅鈍となり、消化不良となるのである。

次に、今一つの原因である食事の方法の不適正とは、近來、醫學が唱へる食物の量と、食事の時間を規則正しくせよといふ事で、之が非常を誤りである。何となれば人間は機械ではないのと、食物なるものは不同であるからである。それはどういふ譯かといふと、食事と食事との間の時間中、運動をする事もあれば、運動をしない事もある。それによつて食物の消化に差異が生ずるのは當然である。又、食物に於ても、其種類によつて、消化に



遅速あり、一時間で消化する物もあれば、三時間以上費す物もある。故に、規則正しくするに於ては、食事の時、空腹である事もあれば、未だ空腹にならない事もある。空腹なら食慾が旺盛で消化は良好であるが、未だ食慾が起らないのに、時間であるからといつて無理に食物を攝れば悪いにきまつてゐる。それは、前の食物が停滞して居る上に、新しく食物を入れる場合、前の食物は腐敗酸酵してゐるから、その毒素の爲に、新しい食物の消化は、妨げられるのである。而もそれが又消化しきれない内に、又時間が来たといつて仕方なし食ふといふ具合で、漸次消化不良となるのである。故に正しい食事の方法とは、前の食物が充分消化し盡してから食事をとるのである。そうして、前の食物が消化したか否かは、食慾といふいとも正確な指針があるから間違ひないのである。故に空腹即ち食慾があれば食ひ、なければ食はないといふやうにするのが本當である。従而、正しい食事法とは食ひたい時に食ひたい物を、食ひたい量だけ食ふといふ、言はば自然である。そうして食ひたいと思ふ物は、其時何等かの必要上、身体が要求してゐる爲であるから、それを食

へばいいのである。又量も同一の意味で、必要をだけ即ち食ひたいだけ食ふべきである。又、食ひたくない物を薬になるとか、栄養になるとかいつて我慢して食ふのも間違ひであると共に、食ひたい物を我慢して食はないのも不可である。又食慾があるのに喰べ過ぎるといつて中止するのも不可であり、満腹して食慾がないのに、無理に詰込むのも勿論不可である。要は飽迄自然でなければならぬのである。

然し、右の方法が良いからといけて、境遇上、何人も行ふ譯にはゆかないので、食事時間の一定してゐる人は、其場合、量によつて加減すればよい譯である。そうして食物は、空腹でさへあれば、如何なる物も美味であり美味であれば、栄養満點である。故に、右の如き食事法を實行すれば、消化不良など絶対發り得べき筈がないのである。

然るに、不自然な食事法と共に、輕症の胃病發生するや、大抵は胃薬を服用するのである。胃薬は消化薬であるから、最初は消化を援け、苦痛は解消するから治療したと思ふのであるが、眞の治療ではないから、復發病し復服薬、又治療し復發病するといふやうに繰



返し、終には本格的胃病となるのである。元來消化薬なるものは、重曹が主であり、食物を柔軟にするのである。所が本來、胃の腑の役目は、嚥下した食物を胃自体の活動によつて柔軟にするのにあるが、其役目を消化薬が分擔するから、胃の活動力は漸次退化する。退化するから不消化になる。不消化になるから消化薬を服むといふやうに、悪循環作用となつて、胃は漸次弱体化するのである。加ふるに一旦吸収された薬劑は、薬毒に變化し、胃中に還元されて胃壁外へ浸潤し、凝結するので、その凝結が胃の壓迫材料となつて胃はいよいよ萎縮し、鈍化し、弛緩するので之が即ち胃下垂である。又薬毒を解消すべく、自然作用は胆汁をしきりに胃に向つて送入する。之が、胃酸過多症である。又胃部に溜結せる毒素の淨化作用が胃痛の原因である。然し、胃痛には二種あつて、凝結毒素が胃を壓迫する痛みと、凝結毒素が溶解する痛みとある。前者は満腹時に痛むのである。それは、満腹によつて胃と凝結毒素と壓迫し合ふからである。後者の場合は、溶解毒素が胃中に浸潤し胃壁の一部に溜溜してゐる。それが空腹による胃縮小の爲に痛むのであるが、重に前者

は強痛、後者は輕痛である。胃痙攣の激痛は、前者に屬し、第一淨化作用の極點に達した時即ち毒素凝結が最も硬化し、強度に胃を壓迫する爲で、醫療はモヒの注射によつて感覺を麻痺させ、一時無痛たらしめ、安靜にして流動食を攝るのである。それが爲、淨化作用が弱るから、毒素硬化は鈍り、又胃は、流動食によつて弱化し、抵抗が弱まるから、一時少康を得るのである。又胸焼は、胃部の溜結毒素溶解のための局部的發熱である。

次に、胃潰瘍の原因は、大部分消化薬の連續の爲である。稀には大酒の爲もある。それは消化薬が食物を柔軟にすると共に、胃壁をも柔軟にするからである。柔軟化した胃壁に食物中の固形物が觸れると、そこが破れて出血する。それが胃潰瘍の出血であり、痛みも伴ふのである。そうしてその多くは、最初胃壁の一部に極微少の缺陷を生じ、少量の血液が不斷に侵出する。それが胃底に溜溜し、漸次増量するに従ひ、消化を妨げる事がある又その出血が、胃壁から外部へ浸潤し、胃以外の局所に溜溜し、又は腸の上部に溜溜する事もある。此溜溜が多量の場合、胃部より腹膜部にかけて膨滿し、淨化作用によつて嘔吐



する場合、驚く程多量の血液を出すか、其際の血液は、コーヒー色を呈し、熱視する時、多少の微粒状血液を見るのである。又此血液滯溜が幽門部を壓迫し、幽門狭窄を起す事もあつて、その爲嘔吐を促進するのである。是等によつてみても、消化薬の害たるや、實に恐るべきものがある。

大酒の爲の胃潰瘍は、實は大酒家は飲酒後又は飲酒中に、胃薬を用ひる癖の人が多いので、そういう人は、酒の爲よりも、胃薬の爲である。

それから極稀ではあるが、胃薬も用ひず、痛み等もなく、何等の原因もなしに吐血又は小さな血粒が痰に混つて出たりする事がある。此症状は醫師も診断に困るのであるが、先づ胃潰瘍に近い症状である。之は如何なる譯かといふと、胃の一部に極微な腫物を生じ、そこから血液が滲出するのであるから、一時吐血等があつても放任しておけば自然に治癒するのである。

### 三、腎臓及び糖尿病

次に、最も多い病氣に腎臓病がある。之は急性と慢性とあるが、世間、腎臓病と稱するものは其殆んどが慢性であつて、急性は極稀である。急性の症状は、四十度前後の高熱を出し、背面腎臓部の左右兩方か又は一方が激痛を伴ふのである。此場合激痛の爲、腰を動かす事は不可能で、多くは身体を彎曲させて呻吟してゐる。そうして蛋白は多量に尿と共に排泄されるのである。之は自然治療によつても、一二週間にて順調に治癒するのである。

慢性腎臓病の症状は、人も知る如く尿と共に蛋白の排泄及び浮腫、腰痛、疲労感等である。そうして浮腫のある場合、尿量は減るのである。醫家は蛋白の排泄ある程、病氣昂進と解釋し、蛋白を無からしめようとして、鹽分攝取の禁止をなし、又は牛乳の多量飲用を止め、薬劑としては利尿劑を用ふるのであるが、之等の方法は悉く誤謬であつて、私の發見による原理を次に述べてみよう。

腎臓疾患に於て、何故に尿と共に蛋白が排泄せらるるかといふ事は、醫學上未だ明か



ないやうである。それでは蛋白とは何であるかといふと、實は然毒又は尿毒、藥毒が、背面腎臟部に凝結し、それが体温計に表はれない程の微熱（掌を宛てれば良く判るのである）によつて溶解し、一種の液体となつて腎臟内に浸潤し、尿と共に排泄せらるるのであつて勿論淨化作用の爲である。故に、蛋白が排泄せらるるだけ病氣は輕減するのである。その證左として、私が多くの腎臟病患者を治療の際その溜結毒素の溶解施術を行ふや、微熱が發生して、一時は蛋白の排泄が非常に多くなるのであるが、漸次少量となり、終に全く無蛋白尿となつて完全に治療するのである。私が治療した腎臟病患者は何れも同様の経路をとつて完全に治療したのである。

然し、茲に大いに注意を要する事がある。それは無蛋白尿であつても、腎臟の疾患がある事實である。醫家は蛋白のみによつて腎臟疾患の有無を斷定するのであるから、無蛋白の場合には、腎臟疾患はないといふのである。故に、無蛋白で浮腫のある場合、その浮腫の原因が不明で診斷を下す事を得ない實例を、私は度々聞かされてゐる。之は醫家も常に經

験する處であらう。では、無蛋白腎臟疾患とは、如何いふ譯かといふと、背面腎臟部に凝結せる毒素の淨化作用がおこつてゐない爲である。故に、斯様な無蛋白尿患者は、有蛋白尿患者よりも悪性である事は勿論である。そうして此症狀である患部は必ず無熱である事で、無熱であるから、凝結毒素が溶解しないから、蛋白が無いのである。

茲で、注意しておきたい事は、腎臟部の凝結毒素が、如何なる悪作用をするかといふに此凝結毒素は、腎臟を壓迫するから腎臟が萎縮する。即ち萎縮腎となるのである。それが爲、腎臟の役目である尿の處分が完全に行はれ得ない。即ち全尿の處分が困難となるから尿の幾分は、腎臟外へ浸潤するのである。そうしてその餘剩尿は、全身凡ゆる方面に滯溜凝結するので、その最も凝結するのは肩部で即ち、肩の凝りがそれである。又、腹膜部に滯溜凝結する事も多いので、之が腹膜炎となり、又盲腸炎、胃病、喘息、肋膜炎、所謂肺結核、淋巴腺炎、齒槽膿漏、首筋の凝り、眼病、腦疾患等は勿論の事、凡ゆる疾患の原因となるのである。獨逸に於て、萬病尿酸説を唱へる學者があると謂ふが一面の眞理は



あるのである。故に、腎臓萎縮は完全に治癒させなければならぬが、それは蛋白の排泄によつてのみ治癒するのであるから、蛋白の排泄こそ、最も必要を課である。

右の理が未発見である醫學は、蛋白の排泄を恐れるので、其爲鹽分禁止を行ふが、人体は鹽分を攝取しなければ著しく衰弱する。又牛乳飲用も衰弱を増し、安靜療法も同様で、此三種の方法を行ふ時、完全に衰弱するから淨化作用は停止さるるので、腎臓部の微熱は無熱となり、從而、無蛋白尿となるからそれを治癒するやうに思ふのである。然し、眞の治療ではないから、一度腎臓病患者となると慢性となり、一進一退の経路を辿り、全治する例は稀である。此理によつて、速かに治癒させようとすれば、大いに運動をなし、高熱を出し、蛋白を多く排泄させる。それが最良の治療法で勿論食事は普通食でよいのである。次に、腎臓結核があるが、之も眞の腎臓結核は極稀であつて、誤診の方が多いためである。そして、醫家に於ては左右孰れかの腎臓の剔出を憚めるのである。然し、手術の結果は豫後良好であつたとしても、全身的活力は減じ、普通人としての活動は先ず困難

であるといへよう。そして、醫家は血尿によつて結核の診断を下すやうである。然し、私の經驗によれば、腎臓以外の原因による血尿もあるのである。それは如何なる譯かといふと、多くは兩鼠蹊腺上部の微熱又は輕微の腎盂炎による發熱によつて、輸尿管の附近が常に熱せられてゐるので、尿が輸尿管を流下する際、熱尿となり、それが尿道を通下するので、尿道粘膜の薄弱なる人は、粘膜が火傷するのである。その火傷部の缺陷から血液が浸潤して血尿となるのである。之等は右の微熱部の毒素を溶解するに於て、大抵數日間で容易に全治するのである。

然し、稀には眞の結核性腎臓病もあるが、之は腎臓部に痛みがあり、それが膀胱に移行し、攝護腺から墨丸に迄移行するといふ悪性で、非常に痛苦もあつて、最も難症である。

次に、糖尿病であるが、之は醫學上膀胱の疾患とされてゐる。それは膀胱によつて製出されるインシュリンなる成分が不足するのが原因といはれ、治療はインシュリン注射を行ふが一時は相當の効果はあるが、根本治療の方法ではないから往々再發し、全治は不可能



である。そうして此病氣に對し、醫療では極端な食事の制限をなし、糖分を與へないやうにするのは勿論、種々なる食物を攝らせるので、患者の苦悶と經濟的負擔は少なからざるものがある。而も米食までも制限するから、日本人としては最も困る譯である。

私の研究によれば、此病氣は毒素溜結が、脾臓及び肝臓の下部を壓迫してゐるので、右の毒結を溶解するに於て、完全に治癒するのである。そうして私が治療の際は、食物は、普通食によつて治癒するのであるから、食物の制限など必要はないのである。然し近來、醫家によつては普通食を攝らせるとの事であるが、之等は覺醒した譯である。

#### 四、 肋膜炎及び腹膜炎

肋膜炎及び腹膜炎も相當多い病氣である。先づ肋膜炎から説いてみよう。此病氣は醫學では三種に別けられてゐる。濕性肋膜炎、化膿性肋膜炎、乾性肋膜炎である。元來肋膜炎は、肺臓を包んでゐる膜と膜との間隙に空虚が出来、そこへ水即ち尿が溜るのを濕性肋膜炎

炎といひ、膿が溜るのを化膿性肋膜炎といひ間隙だけで、水も膿も溜らないのを乾性肋膜炎といふのである。此病氣の原因は自發的と他發的とあつて、他發的とは例へば胸部又は脊部の打撲又は力業、機械体操の如き勞作等によつて多く起るのである。自發的は何等の原因もなしに發生するのである。そうして、濕性の原因は、他發的にせよ、自發的にせよ腎臟萎縮による餘剰尿が集溜する爲である。そうして濕性は醫療に於ては利尿劑の服用、及び穿孔によつて排水するのであるが、利尿劑は逆作用が起つて、多くは経過不良である何れかといへば、穿孔排水の方が経過良好である。然し、一旦治癒しても殘存尿結のため再發し易いのである。

次に、化膿性の原因は、脊髄カリエスと殆んど同様であつて、脊髄から膿が肋膜へ浸潤滯溜するので、その膿量は割合多量であつて悪性に至つては、醫療は穿孔排膿を行ひ、數ヶ月又はそれ以上に亘つて、毎日相當量の排膿があるのである。然し乍ら、最初からの化膿性もあるが、濕性が長時日を経て化膿し、化膿性肋膜炎になる事もある。そうして無穿



孔にて安靜療法を行ふ醫師もあるが、其場合時日を経るに従つて化膿は漸次固結し、胸部は板を張りたる如くになり、此症状を診て醫家によつては、肺が腐敗して無くなつたといふが、之は謬りも甚だしいのである。そうして斯ういふ症状は、大抵は左右いづれかの肺部であつて、膿結した方の肺は、呼吸が不能で静止してゐるから、健全肺の方が二倍の活動をせねばならぬので、自然呼吸が大きく、困難である。此際背部から視る時、一方の肺は不動で、一方は強動であるからよく判るのである。然るに不動の方の膿結溶解を行ふや膿は喀痰となつて、旺んに排泄し初め、徐々として呼吸を営み始めるのである。之によつてみても肺が腐敗して無くなつたのではない事を知るであらう。以前、兩肺が腐つて駄目だといはれた患者を、私の弟子が治療し、今は全治し、健康で活動しつつあるといふ事實もある。そうして化膿性は、醫療では殆んど不治のやうである。

然るに、濕性にしろ、化膿性にしろ、發病するや、醫療をうけず放任するに於ては、自然淨化によつて瀦尿及び膿は喀痰となつて排泄され、大抵は全治するのである。

次に、濕性は最も多く、化膿性は次で、乾性肋膜炎は極稀で、普通乾性肋膜炎と診斷された患者は、私の經驗によれば殆んど肋間神経痛を誤認されたのである。

爰で、肋間神経痛に就て説く必要があるが此病氣は非常に輕重があるのである。そうして肋膜炎と誤られ易いのも特徴である。重症は呼吸すらも痛みに堪えかねる位である。これも放任しておけば、發熱と喀痰によつて、全治するのであるが、醫療は濕布、氷冷、注射等の凡ゆる固め療法を行ふから、一時治療しても必ず再發するのである。

そうして、右に述べた三種の肋膜炎及び肋間神経痛の症状としては、深呼吸をすれば、痛みのある事と、息苦しいのが特徴で、其他盜汗、多睡眠、眩暈等がある。

次に、腹膜炎は、肋膜炎とよく似てゐる病氣で、やはり濕性と化膿性の二種あるが、乾性はないのである。濕性は、腹膜に尿が瀦るのであるが、之も利尿剤を用ふる時は、既存療法中にある如く、漸次悪性となり、而も穿孔排水療法を行ふに至つては、その逆効果が甚だしく、一回は一回より悪性となり、且つ膨滿は彌々甚だしく、逐には、臨月時の腹部



よりも膨大するものである。無論斯うなれば生命は失いのである。

次に、化膿性は腹部が餘り膨大せず、寧ろ固結性であるから、一見普通の腹部と思はれるので、醫診に於ては、相當重症であつても發見出來得ない事がある。故に、此化膿性腹膜を肺結核と誤診さるる事さへあり、全く、事實とは思はれない程であるが、私は屢々經驗して、愕いてゐるのである。尤も、化膿性腹膜に淨化作用が起つた場合、其症狀が、發熱、咳嗽、吐痰、食慾不振、衰弱、消瘦等であるから、肺結核と誤るのも或は無理はないかもしれないが、患者は不幸なものであると共に、醫學の診斷法を改善したいものである。從而、斯ういふ患者を私は、腹膜と腎臓のみを治療するに於て、肺結核が全治した例を、屢々經驗したのである。

そうして、此化膿性腹膜は、誰もが多少とも必ずといひたい程あるのである。恐らく無い人はない位であらう。之は、指頭で壓診すればよく判るので、それは臍の附近にグリグリがあるので、之は膿の固結であるから直ちに判るのである。そうして時々中毒するやう

な、食事も攝らないのに腹痛があつたり、下痢するのは、此固結の淨化作用である事を知るべきである。又、人により、何等の苦痛がないものもある。之等の人に對し指觸すると、驚く事がよくあるのである。そうして腹膜に膿結のある人は必ず顔色が悪いので、私は、經驗上、顔色によつて、化膿性腹膜の有無、輕重を識る事がある。そうして腹膜炎の原因は勿論、腎臓萎縮であるから、腎臓が治療されない限り、絶対に治らないのである。

## 五、喘 息

醫學上、原因不明で、治療不可能とされてゐる病氣に喘息がある。之も日本人に頗る多い病氣であるから、詳説してみよう。

喘息は、醫學に於ては二種に分けられてゐる。即ち心臟性喘息と氣管支性喘息とである。即ち、前者は發作的であつて、發作の起るや激しい呼吸困難を來し、重症にあつては呼吸切迫して、殆んど死の直前に在るやと思ふ程で、實に視るに耐えなないものがある。又後者



は強烈瀕繁なる咳嗽に苦しみ、不眠、食慾不振、呼吸困難等、痛苦甚だしいものがある。そうして何れも週期的に、例へば冬季に限るとか、夏季に限つて發るとかいふ症状と、二六時中斷えず苦しむのと兩方ある。

醫療に於ては、注射によつて一時的苦痛を除去するのが唯一の方法であつて、全く注射するや、如何に激しい苦痛も、忽ち拭ふが如く快癒するのである。然し或時間を経過すれば再發するので、患者は苦痛に堪えず、復注射を受くるのである。然し、注射を繰返す毎に漸次其効果を減じ、やむなく瀕繁に行うやうになり、此結果一日二三十本位、注射を行はなければならぬといふ患者もあるが、之等は全く注射中毒の重症に陥つた者である。然し、斯の如き重症でも私は根治したのである。言ふ迄もなく、喘息の發作や咳嗽は、淨化作用であり、注射は勿論、その藥毒によつて、淨化作用の一時的停止を行ふのである。今日醫學では、喘息の原因に就て、諸説紛々としてゐるが、私の知る限りの説では、あまりに原因に遠すぎ、殆んど暗中模索的である。その説の中で、迷走神経の異常といふのが

あるが、見當違ひも甚だしいのである。

そうして、私の發見によれば、心臟性喘息は、斯ういふ原因によるのである。それは先づ、患者の横隔膜の下邊—即ち胃の上部及び肝臓の上部を診れば必ず腫脹してゐて微熱がある。そこを壓すれば硬化してゐて多少の痛みを感じ、瘰癧結がよく判るのである。之が第一の原因であつて、次に、背部心臟の裏面も同様である。又、胸部及び腋窩及びその肋骨部を指頭にて壓すれば、相當強痛を感ずるのである。之は右の附近に瘰癧結が凝結してゐるのであつて、之が第二の原因である。次に肩部（重に左）臍部の周圍及び大腸部（重に右側）鼠蹊腺部（重に右）背面腎臟部（右又は左）等之が第三の原因である。

原因は、右に示した通りであるが、第一は喘息の主因ともいふべきもので、喘息の本格的な原因である。特に發作は第一が主で、第二が次であつて、第三は、發作の原因とはならず、唯だ咳嗽の原因となるのである。そうして何故に發作が起るかといふと、第一の原因即ち横隔膜下邊及び心臟裏面の瘰癧結が、淨化作用によつて溶解し、それが喀痰となつ



て肺臓内に浸潤して排泄されようとする場合喀痰が濃度の場合と、人により肺膜が厚性の爲、容易に喀痰が浸潤し難いので、肺臓自体の方から喀痰を吸収すべく、強大なる呼吸を管なまうとするので、それが発作である。その證左として注射を行つた後、必ず喀痰を排泄すると同時に発作が止むによつても瞭かである。又、私の經驗によるも、治療の際喀痰の排泄がある毎に発作が軽減してゆくのである。又、此症狀は必ず食慾不振であるがそれは常に毒素が胃を壓迫してゐるからである。從而、輕快に赴くに從つて、患部の腫脹は柔軟となり、小さくなるに從つて、胃は活動を始め、食慾も漸次増加するのである。又第二の原因即ち肋骨部の毒素溜結も、第一とほぼ同様の作用をする。第三の原因は咳嗽だけであるが、發作や呼吸困難を促進する事があるから、是等も除去しなければならぬのは勿論である。

右の原理が正しいといふ事は、如何なる喘息と雖も、本療法によつて完全に治癒せしめ得るにみて、疑ふ餘地はないのである。

右に示した第一、第二、第三の原因に就て、今少しく説いてみよう。喘息には遺傳即ち先天的原因も相當あるが、後天的原因の方が多いのである。然らば、後天的原因とは何ぞややといふと、先づ肺炎に罹るや、肺炎の特性である多量の喀痰の排泄を醫療は抑止するが故に喀痰は或程度排泄されても相當の量を殘存する事になるので、その喀痰は上より下へといふ具合に肺臓外へ逆浸潤を爲し、横隔膜下邊に集溜凝結する。又心臓裏面の毒結は、萎縮腎の餘剰尿で、之が第一原因である。

次に、第二原因は、尿毒及び藥毒が胃や肝臓の上部及び肋骨と其附近に集溜するのである。特に藥毒が多いのであつて、必ず發熱を伴ひ、人により肋間神経痛と同様の痛みがあるのである。第三の原因は、感冒の咳嗽と同様である。

又、小兒喘息もあるが、之は、小兒病の項に詳説する。



昭和十七年九月廿七日印刷  
昭和十七年九月廿八日發行

(非賣品)

「明日の醫術」

著者 岡田茂吉

發行所 東京市蒲田區安方町一七一番地  
印刷者 原清作  
電話蒲田三八六四番

不許  
複製

發行所

東京市蒲田區安方町九四番地  
合名會社 坂井商事出版部  
電話蒲田三八六四番



420  
396



終